

## 講演「学校での動物飼育実践について」 —学校での動物飼育の基礎と子どもへの影響—

桑原 保光



はじめに

近年、家庭で飼育されている動物はペットからコンパニオンアニマルという呼び方が広まり、今日では多くの動物達が家族の一員として迎えられ、人と動物の関係がより密接になってきた。しかしその一方で、人と動物の関係や動物に対する社会の受け止め方や、動物飼育に対する考え方は多様化し、個人の動物観にはいろいろな違いが見られる。この点では学校飼育動物についても同様であり、「生物観察の単なる教材」という考え方から、「家庭動物と同様に子どものペットとしての癒し効果の期待」「生命尊重や思いやりのある円満な人格形成への効用」等に至るまで、活用方法には大きな開きが存在し学校における動物飼育の教育的意義と、目的別の飼育に関する基準作りが必要になった。また、動物愛護管理法（環境省 平成 18 年 6 月 施行）の改正により、動物愛護の普及啓発推進のための教育活動が行われる場所として「学校、地域、家庭」と明記され、こうした動物を通じた情操教育を、学校や地域、家庭が中心となって推進していく事が初めて法律に盛り込まれた。また、「家庭動物等の飼養及び保管に関する基準」で、学校・福祉施設等における管理者の飼養および

保管に係わる義務も規定された。今後は、新しい制度の施行により健康な動物との正しい接し方や、衛生的な飼養管理について動物の習性をよく理解した上で適正に飼育することが望まれる。

### 1 学校飼育動物の意義と目的について

#### (1) 動物飼育と命の教育

いろいろな経験をさせたい、これは大人が子どもにさせてあげたいと願うことのひとつである。特に命にかかわる経験はなかなかできるものではない。命、それは人間にとっても、動物にとっても重いものである。動物を飼って生死を体験することは、子どもにとって貴重な経験になるという考え方がある。しかし、ただ動物に接して、動物の生死を経験してもそれは有意義だったとは言いきれない。校庭の片隅であまり世話もされずに息絶えてゆく動物を見て良い経験をしたとは言えない。生活習慣の一部として動物の世話をし、その動物と同じ時間を過ごしたからこそ、その動物に対する思いと、その生死は子どもにとって有意義な経験になるはずである。大事に世話をした生き物が病気になりその命をなくした時、人は初めて深い悲しみとその命の尊さを実感することとなる。楽しいこと、悲しいことは、世話の期間と思い入れの深さに比例しているはずである。命の大切さを知る（生命尊重の精神）には、バーチャルではなく実体験が不可欠である。

子どもたちが生き物と触れ合い、遊び、観察し、世話をする上で、自分たちと同じ命を持っていることに気付き、その中で、生き物の変化や成長の様子に関心を持ち、生きていることの大切さを理解する必要がある。時には失敗を経験することもある

が、それも命を考えるひとつのきっかけとし、その場合教師は必ず、原因を究明し指導する事が重要である。

こうした実践は自然や生き物への親しみと思いやる心を育み、豊かな人間形成の基礎を培うことが期待できる。



図1 ウサギの出産（胎盤処理の様子）

## (2)動物とのふれあいが心を育てる

子どもは動物を飼うこと自体が学習で、動物を飼いながら「どんな場所が好きかなあ」「もっと上手に育てたいな」などの願いを持つ。そして、飼っている動物の好む環境を調べたり整えたりする。継続的で身近な愛情飼育が、子どもの心に響き動物が可愛いくて放っておけない存在となり、世話は大変だけれども可愛いから休まず世話をするようになり自分の役割を理解し優しい心遣いが生まれる。このような動物との出会いは感性を揺さぶる実体験になり、相手の立場に立った見方や考え方が出来る様になり気付きの質が高まるようになる。

子どもの心を育てるふれあいには、動物が可愛いと思える環境を作ることが大切で、飼育舎が不衛生であったり、子どもの年齢や体力に合った動物を選択しないと、飼育が重荷となり世話が行き届かなくなる。臭い、汚い、が先に来て嫌になってしまう。また、言葉がけも大切で「よく世話ができたね」「いいことに気が付いたね」と褒めてあげれば、より深く興味関心を持ち、責任を持って世話をするようになる。

子どもの発達段階によっては動物との

接し方や感じ方の意義が違ってくる。小学校低学年では、動物とふれあい遊びの中で、動物に命があって人と同じに成長していることに気付き感動する。中学年では、心臓が動いているなど科学的な視点を持ち、生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にようになる。高学年になれば、生命がかけがえのないものであることを知り、自他の命の大切さを自然と身に付け、動物を可愛がり守ろうとする養育心が育成される。

## (3)動物飼育が人に与える効果について

動物とのふれあいは、学校や家庭が抱える課題解決の糸口にもなる。不登校の子どもが「ウサギに餌をあげに学校に言ってみようか」と言う言葉がけで、学校に行くようになった例もある。普段乱暴な子が動物に優しく接しているのに教師が気付き、みんなの前で優しく褒めた、それを機にクラスの子どもたちの見方も、本人の行動も変化したということがあった。ウサギが怖くて抱けない子どもに、ウサギと楽しく遊ぶ子どもの様子を観察させ言葉がけをすると、次第に抱けるようになる。また、言葉遣いや、自律的行動、役割、道徳判断など多種多様な行動についても、観察学習が成立することが明らかにされている。

2007年に発表された研究調査では、小学校4年生で動物飼育を経験した子どもは、バスや電車でお年寄りに席を譲るなど思いやりの気持ちが強まることや、家庭での飼育体験のない子どもが学校で動物飼育体験をするケースでは、社会性や思いやりの行動の意識が高まっていたことが分かった。また、我々が2010年に教室内動物飼育が子どもに与える教育的効果の調査では共感性や向社会性、自尊心感情に有意差が認められた。

人は動物と共に暮らすことで心の潤いや安らぎが得られ、疎外感、孤独感から開放される。さらに、動物を世話することで、生活へのはりや内面的満足感が、生きることへの新たな喜びとなる気持ちが生

まれ、人の心と体に好影響を及ぼすことが実証されている。

## 2 学校飼育動物の現状と課題について

### (1) 飼育環境の課題

学校で生き物を飼うということは、動物の苦手な人にとって想像以上に大変なことである。まして、動物が怖い、咬まれそうで不安、臭い、不衛生と感じている子どもが学校の決められている飼育舎で限られた時間内に、その動物が快適でリラックスした生活を送らせるには、それ相当の努力と工夫が必要になる。飼育委員会の子どもでも動物をゆっくり観察し遊んだりする時間と余裕が無く、機械的に餌と水を与え掃除をして飼育当番が終わってしまう。多くの学校の飼育舎は家畜飼育用と展示型飼育舎の特徴を持ち、複数の動物種が同居する多頭飼育が行なわれている。昔の動物園がそうであったように、外から見て楽しみ観察できることを目的として作られたようであるが、生活科では、子どもの視点に立って現状の教育計画と飼育形態を見直す必要がある。

### (2) 動物に対する子どもの思い

小学校での動物飼育は、動物好きな子どもでも学年が上がる毎に興味関心が薄れていく傾向があり、身近での飼育が実施されていないため、学校の動物と割り切り自分の感情を抑えてしまう状況が見られる。また、子どもの動物に対する興味関心や可愛いと感じ、愛情を持って飼育したいと希望している純真な気持が見過されている。さらに、動物の苦手な子どもの対応や適正飼育管理指導が欠けている。そこでは、飼育自体が負の効果として悪循環を繰り返している。このような状況を早く改善することが求められている。また、参考書「学校における望ましい動物飼育のあり方」が日本初等理科研究会より発行されており、改革の指導書とし参考にするが良い。

### (3) 動物観と認識の開き

現在の学校での飼育は愛玩動物と家畜や鑑賞用動物の多頭混合飼育が行われ、教

育目的と教材動物に対する配慮が欠けている学校が少なくない。それに加えて個人の動物種に対する認識の差が大きく、例えば年代や職業によるウサギの認識は増やして売る、毛皮に利用する等、生産性を追求する家畜と考えている人、犬や猫に代表されるペットと同様に愛玩動物と認識する人がいるように学校では統一された見解がないのが現状である。本来飼育は目的により飼育舎と飼育方法が大きく変わるものである。学校での哺乳類の動物飼育は愛玩飼育の本質から外れると問題視される傾向がある。

飼育だけでなく理科の解剖実習、生物実験、昆虫採取等においても、動物愛護や科学的な共通認識がないため教員間で

教育計画の幅が大きく難しさを感じさせる要因となっている。



図2 ウサギとチャボの多頭混合飼育

### (4) 子どもと動物の関係

生活科での子どもと動物の理想的な関係は、子どもと動物がお互いに触れ合い楽しい時間を過ごすことから始まる。人に慣れてリラックスしている動物と遊ぶことは楽しいもので、人が近づくと、嬉しそうにそばに寄って来るような動物と飼育体験をさせたい。できるだけ人に慣れて、触れられてもストレスをそれほど感じない動物を活用することが望まれる。

動物との触れ合いを繰り返すことにより、子どもは動物の様子や動きを良く感じ取れるようになる。また、相手が喜んでい

るのか迷惑しているのかを判断し、それに対応した行動や先を予測した行動が多く見られるようになる。このように、動物とふれあい遊びを通して、動物の動作や息吹、柔らかさ、暖かさなど、命を感じると共に動物個体の性格や動物種の習性や特徴なども理解できるようになっていく。

継続的な飼育活動から動物に対する愛情が生まれ放っておけない存在になり小屋の掃除や、世話は大変だけれど「うさちゃんを大事にしたいから、お掃除を一生懸命するよ」と責任を持って世話をするようになる。

息の長い活動を設定することが、生活科の生命に関する教育には必要である。

#### (5) 動物飼育は何のため？

ある学校の飼育委員会活動で、話をしていた時のことです。その日は、「なぜヒトは動物を飼うのだろう」という題で、飼う側と飼われる側の、良い点、問題点、などの話をしていました。話が学校の動物に及び、「どうして学校にウサギがいるのだろう」と聞くと、ある子どもから「給食の残りを食べさせるため」と答えが返ってきました。皆さんはこの話を聞いてどう思われますか。もちろんすべてではありませんが、学校の多くの現場では、大きな飼育小屋に、たくさんのウサギや鶏が放し飼いにされ、飼育委員会の当番さんと、飼育担当の先生が、休み時間に忙しく、世話をしているのが現状です。世話は飼育委員に限定され、他の子どもは飼育小屋に入ることはもちろん、餌を与えることもできません。飼育委員も動物達の、水を取り換えたり、餌をあげるのに手一杯で、動物をゆっくり観察したり、動物と遊んだりする時間と余裕はありません。動物の方は、多頭飼育が原因でウサギはなわばり争いの結果、耳や皮膚にカミ傷や、強い雄や雌におしっこを掛けられ毛が茶色くなったりします。鶏は強いオスにつつかれて羽が抜け、頭や尾から血を流していることが見受けられることがある。残念ながら学校での飼育方法は、予

算不足や考え方の違いで、動物を飼ってリラックスをするという愛玩飼育の本質から外れていることが多く、そこに飼育の難しさを感じるのではないだろうか。

### 3 生活科飼育と動物介在教育について

#### ー生活科継続飼育の内容ー

飼育や栽培の過程では、新しい生命の誕生や突然の死や病気などに、命の尊さを身をもって感じる出来事に直面することもある。成長することの素晴らしさや尊さ、死んだり枯れたり病気になったりした時の悲しさや辛さ、恐ろしさは、子どもの成長に必要な体験である。動植物とのかかわり方を真剣に振り返り、その命を守っていた自分の存在に子どもが自ら気付く機会ととらえることが大切である。

動物の飼育に当たっては、管理や繁殖、施設や環境などについて配慮する必要がある。その際は、専門的な知識を持った地域の専門家や獣医師などの多くの支援者と連携して、よりよい体験を与える環境を整える必要がある。

#### (1) 在教育和アニマルセラピーについて

アニマルセラピーとは、Animal assisted activity(AAA)動物介在活動とAnimal assisted therapy(AAT)動物介在療法に分類される。AAAは、訪問型、在宅型、野外型のあらゆる場においてある一定基準に達した動物とその飼い主であるボランティアと受け入れ側の専門家やスタッフなどによって行われる活動で、老人ホーム等の入居者や入院患者などの生活の質を向上させ、情緒的、教育的、レクリエーション的、そして、時には治療的な効果をもたらす機会を与える活動である。AATは、医療上診断が付き治療のある部分で、動物が介在することでより治療効果が期待できると認められた治療法である。広義のアニマルセラピーは動物と飼育者が主にふれあい、一緒に生活することで癒し効果などが得られることである。

近年『人と動物の関係に関する国際会議』で犯罪の低年齢化や凶悪化は世界中で

大きな問題とされ、心の育成に照準を合わせた教育の必要性が求められている。その1つの方法として注目されているのが動物介在教育 Animal Assisted Education (AAE) である。学校での教室内動物飼育で子どもの心の育成を図る為の方法で、広義のアニマルセラピーの新しい分野として期待を寄せられている。

(2)等での動物介在教育(教室内飼育)の基準作成について

学校教育に介在する動物は、動物の福祉と子どもへの配慮と適切な方法で飼育され、健康でおとなしく、子どもによく馴れる事が第一条件である。また、生活科等の飼育計画指導案は教室や校舎内等で日常的に飼育する事を前提とする。人と動物の関係と児童心理の観点から、教育関連施設によって飼育される動物は飼育目的別に動物種や品種性格等を考慮して動物別に選択基準と飼育管理基準を作成し飼育を開始することが必要である。

以下、基準作成時に参考となる事項と飼育備品を示してみる。

- ① 学校、保護者の両者が AAE の重要性和意義目的について説明する。アンケート調査等を実施し、子どものアレルギーなどについても、事前に保護者に尋ねるなど十分な対応をしておく必要がある。
- ② 指導案と目的を定義して事前、事後、系統学習に発展させる。
- ③ 獣医師等の専門家の指導下において飼育目的を明記して実施する。
- ④ 教科目的と教育計画により適正な動物品種を選択する。学校で適切な環境のもとで飼育されている動物も活用する。
- ⑤ 介在する動物が健康で温和な性格を持ち子どもによく慣れていること。
- ⑥ 学級内の子どもの健康や感情を尊重し、年齢に適した動物種を選択する。教室内の匂い、泣き声等が授業の悪

影響にならないような品種を選択する。

- ⑦ 子ども一人一人が指導案に関わっているか、感情の表し方の違いや、アレルギー等を考慮し、子どもと動物との距離間に応じて自主的な体験を重視しながらも、個別指導を行なう。
- ⑧ 休日は当番制で動物を家庭に持ち帰り、家族の一員としての飼育体験を実施する。
- ⑨ 1年生で飼育に慣れたら、2年生では1週間単位での当番制にする。グループ飼育(5~6人)も検討してみる。
- ⑩ 学校と獣医師が動物の健康管理、適性、手入れの状況等を定期的にチェックし指導を行なう。
- ⑪ 飼育年限の決定と教育計画終了時の里親探しと、動物の老後の対応を子どもに考えさせる。  
教育計画による飼育年数の規定を作る。(生活科飼育は2年時で終了、最長でも6年間とし子どもと一緒に卒業させる計画でスタートする。)高学年の飼育委員会活動とは別に考える必要がある。
- ⑫ 飼育ケージの広さの定義を作り、飼料は消臭作用のある餌を使用する。
- ⑬ トイレは消臭効果のあるトイレ砂を使用し毎日交換する。
- ⑭ 動物の定期健康診断の導入、投薬方法、外傷手当、動物の手入れ方法(爪きり、シャンプー等)、毎日の飼育管理方法等のマニュアルを作成する。
- ⑮ お勧め飼育用品 清掃がし易く軽いもの。(ケージ・寝箱・トイレ・給水器・えさ入れ・牧草入れ)  
(考飼育用品図3~10)



図3 室内飼育用ケージ



図4 引き出しトイレ付き



図5 外付け固定式給水器



図6 固定式トイレ (消臭用トイレ砂)・フード入れ  
牧草入れ



図7 ラビットフード



図8 牧草 不断給餌 (チモシー)  
切らずに長いまま与える



図9 消臭効果のあるウサギ用トイレ砂



図10 整腸乳酸菌・毛求症の予防にパピボール

#### 4 生活科動物介在教育 『動物ふれあい教室』 指導案 授業実施例

##### ●生活科動物介在教育授業実際例 1

動物ふれあい教室（ウサギ編 図 11～22）

(1) 大単元名「おおきくなあれ」

小単元名「一生懸命世話をするよ」

(2) 小単元の目標

動物を育て生き物に関心を持ち、成長の様子を観察し生命を持っている事を知り大切にす。

(3) 指導要領

- ・獣医師とのチームティーチングを取り入れる事により、正しい知識を身に付けさせると共に、動物への興味関心を喚起する。
- ・グループ学習を取り入れる事によって、ウサギとのふれあいを多く体験できる。
- ・ウサギとのふれあいを通し、生命の尊さや神秘性について気付かせる。

(4) 単元指導計画

事前：ウサギのことしりたいな！

本時：生きているってどんなこと？

事後：ウサギを教室で飼育する。

(5) 系統

中学年：動物の体の仕組みや生活を理解する  
高学年：動物を飼う事の責任について学ぶ。

(6) 本時の学習

めあて：ウサギを大切にしながら、やさしく抱くことができるようにする。

準備：聴診器（6グループ12本）

実験用心音計 めいぐるみ

ウサギ用サークル

ウサギ 12羽（子ども6-10人に1羽）

(7) 評価基準

- ・進んで心音を聴き、ウサギとのふれあいに意欲的に取り組んでいる。
- ・ウサギの気持ちになって、恐がらないように抱こうとしている。
- ・ウサギも自分も生きている事が分り、命を大切にしようとしている。



図 11 担任教師と獣医師の説明



図 12 T T方式グループ学習  
ウサギと仲良く遊ぼう



図 13 仔ウサギの観察



図 14 ウサギに優しく接する



図 15 ウサギの心音を聴く ドキドキしている



図 16 自分の心音との比較



図 21 獣医師に直接質問してみよう



図 17 友だちの心音が聞こえる



図 22 手洗い指導



図 18 怖がる子どもには無理をさせない  
タオルを使って抱かせてみる



図 19 ウサギが抱けた！ あったかい！



図 20 ウサギとのふれあい楽しい

●生活科動物介在教育授業実際例 2  
動物ふれあい教室（鳥類編 23～26）

(1)大単元名「生き物と友達」

小単元名「生き物と友達になろう」

(2)目標

①生まれたチャボを育て世話をした動物の成長，結実などに関心が持てるようする。

②動物の飼育活動を通じて，成長や生命の大切さを実感させる。

(3)学習内容

①飼育舎や教室で飼育している動物と仲良く遊ぶ。

②動物とのかわりを通じて，気づいたこと，感じたこと，驚いたことを作品にする。

(4)展開

①獣医師とのチームティーチングを取り入れる事により，正しい知識を身に付けさせると共に，動物への興味関心を喚起する。

②グループ学習の中で日頃の疑問と飼育方法について獣医師に直接聞いて見る。

<遊びの内容>

① チャボの持ち方指導

② 餌，ミルワームを与えてみる



- ③ 雌雄の見分け方
- ④ 体の特徴 耳を観察してみる
- ⑤ その他

<ふれあい>

- ① 児童と鶏の心音聴診
- ② チャボの取り扱いの注意事項
  - ・両手でそっと押さえる
  - ・雄のケツメに注意
  - ・顔の前でチャボと向き合わない

準備：聴診器（6グループ12本）

実験用心音計，サークル，餌

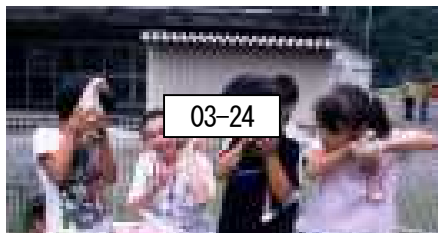


図23 鶏に心臓はあるのかな？



図24 鶏の耳はどこかな？



図25 鶏の好きなえさは何かな？

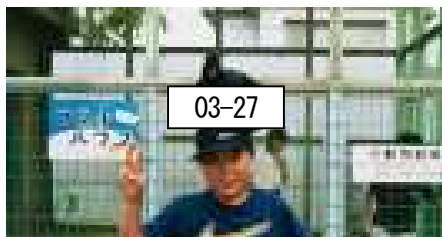


図26 夏休みに人工ふ化で生まれました

## 5 生活科における動物介在教育（教室内飼育または校舎内飼育）の具体的な指針について

動物飼育教育では目的と役割により、動物種の習性と特徴を理解した上で動物を選択する必要がある。生活科から始まる教科教育の中で、飼育栽培の年間計画としてその動物の餌として適した植物の種まき等の系統学習から道徳、理科、総合学習、食農教育、地球環境教育などの高学年の教科に展開させる実践指導の確立と研究が必要である。また、動物の生活と一生をテーマに、交配、妊娠、出産、育児から親の世話や老齢動物の世話など、一貫した計画指導が望ましい。

### (1) 目的に合った動物種の選択と指導

小学校低学年では、学年や体力に応じた動物種と品種の選択が重要で、生活科の飼育体験が動物嫌いにならないよう教育的配慮が必要である。生活科の動物飼育において、親代わりになって世話することにより動物はその子どもを頼り懐いてくる。その過程で子どもは動物への豊かな感情や、やさしさ、思いやりといった気持ちが芽生える。このような愛情飼育指導を目的に動物を導入する必要がある。また、動物種は温和な性質で人に良くなつく小動物を選択することが望ましい。

教室内飼育に適した動物は、ウサギの小型品種のホーランドロップ（去勢した雄が最適）、ネザーランドドワーフ、モルモット、鳥類では愛玩鶏プチッコ、手乗り鳥類等の、平均寿命2～8年の動物から選択すると良い。教室内動物飼育の目的別選択基準を参考に導入するとより良い効果が得られると考えている。これらの動物は導入時に費用が掛かるが餌代や排泄物が少ないので、室内飼育に適している。

### (2) 子どもの動物観

小学校1～2年生の子どもに「ウサギの好物は何？」と問いかけると、声をそろえて「ニンジン」と答えが返ってくる。本当

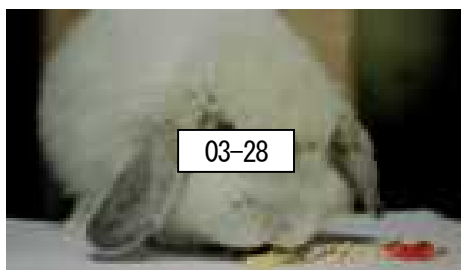


図27 仔ウサギ

にニンジンが好きなのかは疑問で、絵本やテレビで得た情報が先入観（日本人の動物観の特徴）として現れている。事前学習として、飼育栽培を兼ねてウサギの好物と思える野菜や植物の数種類の種まきから開始する。ウサギの教室内飼育計画で興味関心の相乗効果を目的に仔ウサギがクラスにやって来る頃に収穫を合わせ、好物を実証してみる計画を立てる。

こうした計画は中高学年においても同様で、食糧になる植物や野菜を作る楽しさや大変さを体験し、収穫した物を平等に人や動物に分け与える試みも行ってみたい。人と動物の食物と食べ方や体の仕組みの違いに気付かせ、動物が食べる様子を観察する時に「おいしそうに食べているね」「手作り栄養満点の野菜で嬉しそうだね」「残さず食べてくれて良かったね」など誉め言葉を必ず掛け成果を評価することが大切である。全体から見た自分たちの仕事と役割の大切さや責任感を感じさせ、飼育栽培の喜びを心と体で体験できる計画を立て実施する。

### (3) 交配、妊娠、出産の計画的な指導

学校の飼育体験では、生活科でウサギの交配、妊娠、出産の過程を教師主導計画で経験させ、中高学年では理科、道徳、総合学習等で課題を出して自主計画を作成し体験させてはどうだろうか。事前学習で、交配はどうするのか、何のためか、生まれた動物はどうするか、どのように育てるかを指導する。そして、妊娠期間、出産の時期、場所の準備をどこにするか、出産の様子を観察、離乳や躰計画、新学期に向けて

4月頃に2ヶ月令の仔ウサギがいる計画など、幅広い視野から指導したい。また、自分たちの計画案について獣医師に相談し指導を受け、いろいろな体験を考え調べ期待と不安のなかで大きな想像力とロマンをいだかせる指導が必要である。

ウサギの性周期のサイクルは短く年3-4回の出産が可能であるため、命の不思議さや神秘性、多様性などを実感する有意義な感動体験が計画的に実施する事が可能で、楽しい飼育と学校全体の動物介在教育の目的が叶うのではないだろうか。

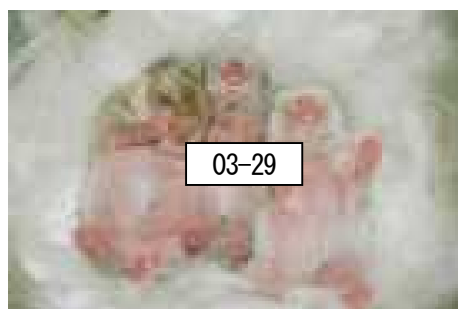


図28 生後5日齢の仔ウサギ

### (4) 飼育と管理指導計画

ウサギの愛情飼育体験計画では生後から2ヶ月令までが躰の適期で仔ウサギのかわいらしさを一番感じさせ、繁殖に携わった人だけが味わえる楽しさがある。観察と触れ合いの過程で子どもに好印象を与え一生忘れられない良い経験となるだろう。仔ウサギの性格判断をしながら社会化と順応のための躰を行ない、クラス内飼育を実施するのに適性がある個体を獣医師に相談して選択すると良い。飼育する動物個体が決まったら、事後学習で似顔絵を書



図29 ウサギと記念写真

き名前をつけて掲示すると、愛着や親近感が日ごとに増しクラスの話題の中心となる。事前学習の中で学校の飼育頭数を一定以上から増やさないと検討する。教室に飼育する仔ウサギ以外は動物商等にお願いして、仔ウサギの引き取りや飼育関連用具類か餌と交換してもらう方法もある。また、世話の仕方を勉強しながら動物の習性や特徴も理解し、飼育方法もだんだん馴れて余裕が出てくる。その過程で休日や長期休暇を利用して飼育動物を家庭で飼育体験をする「ホームステイ飼育活動」などの飼育計画を実施させたい。

#### (5) 食育教育について



図 30 鶏の食肉内臓検査

人間は、生き物から様々な恩恵を受けている。子どもは動物を育てながら楽しく遊び、命を育む驚きや喜びを深め、心も癒される。また一方で、人間も動物の一種で生き物の大切な命をいただいて生活している。「命と食」を考える食育（食農）教育の重要性についての指導が必要である。

毎日の食生活の中で、感謝の気持ちを大切にし「ありがとう」「いただきます」「ごちそうさま」を忘れないような指導をしたいものである。食育教育、それは、今を生きるものと、生かされるものの「命と心」をテーマにしたひとつの動物介在教育である。

人間は動物を愛し慈しみを持って飼育している反面、家畜として食べるために飼育し、この「命」をいただいて生きている。どんな時期にどのような教材でどのように教育するか、かわいい、かわいそうと言

う観点だけでなく飼育を通じて食の生産と消費の過程を食物連鎖の一環として理解させることが重要である。

写真 鶏の食肉内臓検査

## 6 人と動物の共通感染症と予防法の基礎知識

動物由来感染症による被害の程度は原因となる病原体と感染動物の種類により大きく異なる。人と動物の共通感染症は現在約 150 種が知られている。病原体としては、ウイルス（狂犬病、口蹄疫）、リケッチア、クラミジア（Q 熱）、細菌（ペスト、パストツレラ、サルモネラ症、レプトスピラ症）、寄生虫（コクシジウム、エキノコックス症）、真菌などがある。これらの病原体の中には、エボラ出血熱などのように病原性の極めて強いものも含まれるが、それほど病原性の強い病原体でなくとも、感染した人の健康状態あるいは免疫状態によっては重篤な症状を示す場合もある。また、病原体を保有している動物自体が無症状である場合も少なくない。学校飼育動物の場合、成人に比べると抵抗力の弱い児童が動物の飼育や世話を担当している為、特に人と動物の共通感染症に対する十分な認識を持つ事が必要である。

人と動物の共通感染症を発病の程度により、狂犬病、ブルセラ病や炭疽のように動物と人の両方に重篤なもの、牛、豚の口蹄疫、鳥類のニューカッスル病のように動物には重篤であるが人に軽微なもの、Q 熱やダニ脳炎のように動物には軽微であるが人に感染すると重篤な症状を示すものに分類することができる。

動物の健康管理と衛生管理指導が学校では最も重要な予防方法となる。

### ●人と動物の共通感染症の予防対策

①過剰なふれあいは控える。（口移しで食物を与えない）

細菌やウイルスなどが動物の口や爪などにいる場合があるので注意する。

②動物を触る前後に手を必ず洗う。

病気の予防のために手を洗うのがいい

する習慣をつける。

③動物の身の回りは清潔に保つ。

飼っている動物はブラッシングや爪切りなど、

定期的に手入れをして清潔を保つ。

④糞尿はすみやかに処理する。

⑤掃除はこまめに行ない、糞尿は気がついたらすぐに処理する。

⑥動物も定期検診を行ない、病気の早期発見をするように努める。

⑦体に不調を感じたら、早めに受診する。

(体調が悪い時は動物と長時間接しない)

## 7 飼育動物の管理と健康

### (1) 日常管理の仕方

①給水：毎日水飲み容器をきれいに洗い、新鮮な水を十分に与える。

②給餌：食器をきれいに洗い乾燥させる、毎日動物に適した餌と、食べきる必要量を与え 残った餌はその都度片づける。

③清掃：飼育舎は、毎日掃除をして清潔にしておき、汚い所や、じめじめした場所では、動物が病気に罹りやすくなる。床がぬれていたら掃除をして出来るだけ早く乾かす。

④手入れ：全身をブラシでとかし、定期的にシャンプーをする。

⑤飼育舎の環境と構造：施設環境条件として飼育舎と運動場、給排水設備、手洗いの完備、触れ合い広場を併設する。飼育舎は、日当たりの良い所で子どもの身近な場所に設置し、動物が逃げられない対策と外部より犬猫、野鳥、ネズミ、ヘビ等が侵入できない工夫をし、雨が吹き込まない構造が良い。

⑥温度管理：動物は厳しい暑さ



図31 ロップイヤー

寒さには弱く、夏は日陰になる場所を作り、風通しを良くし、冬はそれぞれに巣箱を用意して隙間風を防いでやる。梅雨の時期は湿気に気をつけ風通しを良くする。

⑦砂浴、水浴、沐浴：外部寄生虫や付着した異物の除去、健康維持、病気の予防になる、その際は清潔に保つ。

### (2) 動物の健康管理

動物飼育管理に携わる前に動物の生態や習性を理解しその動物が本来の生活形態や(昼行性、夜行性、樹上生活、地上生活、単独行動、群行動など)餌の給餌方法(肉食、雑食、草食)を理解しておく必要がある。

動物の中には病気になっても具合の悪さを隠そうとする習性があり、そのため変だと気付いた時には手遅れで、あっという間に死んでしまうケースも見られる。日頃から良く観察し、早期の発見、早期治療が重要である。少しでも異常が見られた時は、速やかに獣医師に相談をする。

#### ① 健康チェックのポイント

- ・元気で活動的か、食欲の有無
- ・鼻水、涙、眼やにの有無
- ・毛並み、羽毛等に汚れや異常の有無
- ・爪や歯の過長
- ・糞尿の状態はどうか、下痢の有無
- ・体重の変化や行動、動作の異常
- ・体に傷や腫れの有無
- ・羽を膨らませたり、うずくまって居ないか

#### ② 病気を防ぐポイント

- ・餌や水を毎日きちんと同じ時間に与える
- ・飼育舎はいつでも清潔にし

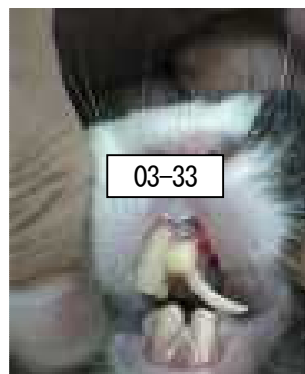


図32 健康チェック 歯の過長

ておく

- ・運動不足やストレスをかけない
- ・定期的に広い場所に出して適度な運動をさせる
- ・温度や湿度の維持

## 8 獣医師支援による飼育を楽しくするための改革計画

### (1) 飼育目標と飼育計画の実践

新学期に向けて飼育動物に対する学校の教育方針を考えて見てみよう。学校の動物はどのような目的で飼われているのだろう。教材飼育、展示飼育、家畜飼育、愛玩飼育、動物介在教育飼育なのか、その目的に沿って、学校の動物をより有意義に活用するために飼育の目標と年間の指導案を考え、動物種の習性と特徴を理解し、楽しい飼育に改革したいものである。

#### ●飼育目標と指導案の計画

- ①仔ウサギや卵を計画的に産ませ、育て、誕生と成長について考えてみる。
- ②生きるための食文化（鶏の卵を例に食物連鎖）について考えてみる。
- ③糞を使って植物を育てるリサイクル方法を取り入れてみる。
- ④オスとメスの身体と習性の違いを考えてみる。
- ⑤動物の生活と手入れの仕方について、自分の生活に置き換えて考えてみる。

### (2) 獣医師と連携

新学期が始まったら、学校に獣医師を呼んで早めに指導を受ける。世話の仕方、動物の扱い方、雄と雌の違い、飼育環境で工夫した方がよい所、また、飼育の負担を軽減するヒントが見つかる。その他たくさんのことを一緒に考えることができます。地域の獣医師会や動物病院と連携し飼育管理指導と病気治療の対応をお願いする事が必要である。

### (3) 名前をつけよう

個体識別は飼育の第一歩である。先生方は、子どもが何十人いても顔と名前が一致する。動物も必ず名前をつけると良い。どの動物にどんな名前が付いているのか、学



図33 名前を付けよう

校のみんなが分るように写真（似顔絵）を貼って、名前を書いて飼育舎やケージに表示すると共通認識が持て親しみや愛着が増していく。自分たちの名前の由来を考えてみよう。

### (4) 観察をしよう

名前がついたら1日2回は、1頭ずつ身体を触って観察し飼育日誌を作成する。長い時間でなくてもよいので、体に傷や汚れがないか、餌は食べているか、元気があるか、便の様子はどうか、その動物の健康なときの状態を知ることが病気を早く知る一番の方法である。

### (5) 飼育委員会の動物から学校の動物への改革指導

飼育委員会の児童が、世話に慣れ、動物との付き合い方をマスターできたら、飼育についての発表会などを開催し、飼育舎や動物を全校の児童に開放し、動物とのふれあい方、抱き方など、下級生と上級生の交流会として実施する。

### (6) 教室における動物飼育の勧め

動物には、我々を和ませてくれる効果の他にも、①動物を介したコミュニケーションと人格形成に役立つ。（友達、先生、家族と動物の事を話す、など）②相手の態度や、気持ちに注意が向くようになる③生や死、健康や病気などの実体験をする命の学校④遊びや話の相手⑤自然や科学への入り口など、他にも多くの効果があると考えられる。しかしこれらは、子どもが、動物と愛情を交し合い、これを繰り返す（子供が動物をかわいいと感じる→世話をして

あげる→動物が元気にしている、近づいてくれた、かわいいしぐさをした→また、かわいがりたい)ことによって、実際の効果が出てくる。

教室内や、クラスの近くの場所でかわいい動物を飼育してみよう。自分たちの動物として、より身近なところで世話をすることにより、子どもがより多くの実体験や刺激を受けることができる。実際に教室内で飼育を行ない、「クラス内のコミュニケーションが取れ雰囲気は和やかになった。動物や友達を気遣うようになった。落ち着きがでたようだ」などと、感じている事例が多いようだ。

毎日の世話、匂い、汚れ、アレルギーの子ども等、不安を感じる所もあるが、教室内飼育の重要性と意義目的を学校と保護者が理解し、アンケート調査等を行ない、獣医師との連携で実施してみると意外と問題は少ないようである。長期休暇に、子どもが家庭に動物を持ち帰り世話をしているクラスでは、世話をする順番の予約が一杯なほどの人気である。

#### (7)動物種の導入方法

新規に動物を導入する場合、その飼育目的と対象年齢に合った動物種と雌雄、飼育頭数を決め、純粋種の導入を考えてみよう。純粋種導入の場合獣医師と相談し、国や県、大学等の研究機関や動物商等から導入する。また、動物商の方に動物の子が生まれた時の引き取りや、飼料や飼育関連要具との交換をしている学校もある。

純粋種の飼育の利点は性格や形質が一定している、目的に合った動物を選択しやすい。純粋種で血統が明確であれば、品種としての商品価値が高いので計画的な繁殖を実施しても、引き取り手が多くある事が予想される。

#### (8)休日の対応

休日の動物の世話をどう行なうかは、学校で飼育していく上で大きな課題となっているが、動物を飼育する最低条件として毎日の世話と最後まで飼うことが飼育す

る人の責任である。また、学校飼育動物の存在が「学校の大切な仲間」として愛情と責任を持ち小さな命を大切にすることを子どもに伝える事が必要である。そのためには地域住民と保護者が協力して対応を考えることが必要である。

#### 対応例

- ① 当番制で家庭に持ち帰り、飼育体験を通じて動物の生活と習性を理解する。
- ② 飼育体験を理科、道徳、総合学習で取り入れ、地域住民の協力と理解を得る。
- ③ 親子飼育活動として当番制で学校の飼育活動に参加する。など。

#### (9)飼育の引継ぎを忘れずに

引継ぎを忘れた事例。ある学校でウサギが1匹もいなくなってしまう、飼育相談を受けた獣医師が、無計画な繁殖をしないという約束で去勢手術を行ったオスを1羽と、メスを2羽学校に寄付したことがあった。その年は何事もなく、3羽のウサギたちも健康に過ごした。次の年、新しく赴任された教師が、仔ウサギがいないのは寂しいと他校からオスを1羽もらって一緒に入れた。その後、ウサギはあつという間に繁殖を始めたが、産室が無く子ウサギが死亡することもあり十数羽から増えることはなかった。ところが、その3年後の担当教師と飼育委員はとても面倒見がよく、妊娠したウサギを確認し隔離して産室を作りよく世話をした。ウサギはたった3ヶ月で36羽に増えてしまった。新年度、新しい飼育担当の教員は獣医師に、「増えすぎて困るので、オスを全頭で16羽を去勢してほしい」と依頼の電話を掛けた。

飼育担当になられた教師は、動物の好き嫌いにかかわらず、飼育委員の指導をし、動物の世話を一生懸命やっている。休日も学校に行って、動物の面倒をみている熱心な教師も多い。飼い方や飼育管理指導に悩みも多いようで相談もよく受ける。ところが、次の年に飼育担当になられた教師も同じようなところで悩み苦勞をしているようである。施設の改善等は、1年だけでは

解決しない問題も見受けられるが、是非、引継ぎをしっかりと次の教員の苦労を少しでも軽減し、同様な例を引き起こさないようにするべきである。このような体制の不備が学校飼育動物の課題を大きくしていると思われる。

### おわりに

動物ふれあい教室を行なって子どもたちに「ウサギに触ってどうだった？」と聞くと、「かわかった」「暖かかった」「ふわふわしていた」などの答えが返ってくる。また、「ウサギの耳はなぜ長いのか？」とか「目の位置が人とどうして違うのか？」など人との体の違いに気付く。なぜそうになっているかを説明すると、子どもだけではなく大人の方も強い関心を持つ。聴診器で心臓や呼吸の音を聞き比べ、その音に驚いたり、小さな動物のお母さんが子を産み育てるのを観察し感動したり感心する。我々にとって身近な動物とふれあうことは、命の不思議さや、神秘性、多様性などを知る第一歩である。

子どもたちには家庭で愛されている動物（ファミリーアニマル）や学校飼育動物などの身近な動物の他にも、人が暮らすために役に立つ動物（ウシやブタなどのフードアニマル、盲導犬、救助犬など）がいること、また、たくさんの野生動物が我々人間と同じ地球上で暮らしていることを知ってほしい。これらの動物はそれぞれ「種の保存」のため、群れやなわばりなどの秩序を持ちながら、お互いに関わりあい、地球という生態系を維持している。人間が地球上の生き物の頂点にいるという考え方があり、確かに人間は他の生き物の生活環境を変え、生態に大きな影響を与える力を持っている。その大きな力をどのように使ったらいいのか、身近なところから考えさせたい。人間に飼われるようになって動物の生活はどう変化したのか、人間は一人では生きて行けないし、人間という種だけでも存続できない。動物たちは、私たちが生きるために必要な「食料」や「やすらぎ」

を分け与えてくれる。私たちが、これからも地球上で幸せに生きていくには、地球上の限られた資源と環境を大切に、他の命と共生していかなければならない。子どもたちは、学校飼育動物とのふれあい体験を通じて、生命の尊さを知り、人間には地球上のリーダーとして大切な役割があることを学習してほしい。動物や植物の言葉を我々は理解することができない。そこで何かを感じ取る心が大切になる。この「感じ取る力」こそが「思いやり」である。IT化など社会生活の大きな変化の中で少子化も進み、大人でさえ自己中心的な人が増えているといわれている。子どもたちには飼育動物を通じて、相手の気持ちを感じ取る心の大切さを理解してほしい。自分ができることは何かを考え、自ら行動することは素晴らしいことである。それは、やがて子ども自身を成長させ、「生きる力」を育むこととなるはずである。

飼育されている小動物は、清潔な飼育舎で、健康で人に良く馴れていて、子どもたちが心から触ってみたい、世話をしてみた、かわいいと思える環境作が必要である。また、動物好きな指導者が身近にいて相談できることが望ましい。

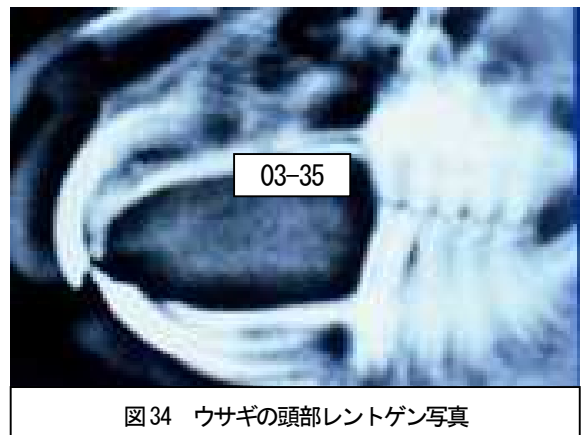


図34 ウサギの頭部レントゲン写真

(群馬県獣医師会／本会副会長)

### 【参考文献】

- 1 群馬県獣医師会（1998）指導書「ふれあい」、「ふれあい実施マニュアル」
- 2 桑原保光他（2000・2003・2004）群馬大学教育学部「新生活科研究」 群馬評論社 pp55-67
- 3 国立教育政策研究所「生命尊重の心を育む実験観察や飼育の在り方に関する調査研究」
- 4 桑原保光他 初等理科教育（2003）飼育栽培の楽しみ VOL.37, NO.6
- 5 教職研修総合特集N0157（2003）「学校飼育動物と生命尊重の指導」教育開発研究所
- 6 群馬県獣医師会（2003）指導書「ふれあい指導案」 電話027-361-9241
- 7 日本獣医師会（2002）「学校飼育動物保健衛生指導マニュアル」
- 8 小学校学習指導要綱解説 生活科編 平成20年8月

